
ナデシコ

まほつか屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナデシコ

【Nコード】

N9575Y

【作者名】

まほつか屋敷

【あらすじ】

小学生の祥太の夏休みです。ノスタルジック風味的な感じ（曖昧）
。ジャンルはどれにすべきか迷ったので文学にしましたが、そんな固くはないですw
かなり短いのでサクッと読んでいただければと思います。

夏の蒸し暑い昼下がり。

小学四年生の祥太は祖母の家に遊びに来ていた。

蝉の鳴き声を聴いてみたり。

うちわで自分をおおいだり。

このうちわは祥太にとって特別なものだった。去年上京していった大好きな姉からのプレゼント。名前は忘れてしまったけれど、きれいな花が描かれている。

Tシャツ、短パンの姿で祥太はひたすら縁側に座っていた。かわらに冷水の入ったペットボトルを置いて。

祥太が住んでいるのは都会とも田舎とも言えない地域だったが、この祖母の家は間違いなくド田舎だった。

何しろ一番近くのスーパーまで車で二十分近くかかるし、気の利いた自動販売機なんて祖母の家に来てからの三日間、見ていない。

2

見渡す限りの田んぼ、畑、山。

美しい大自然だなんて祥太は思えない。右を見ても左を見ても、同じ風景が続いていて、ぼつりぼつりと家が建っているだけ。正直、すぐに見飽きてしまった。

「わんっ」

どれくらい経っただろうか。開きっぱなしの祖母の家の門を潜り、犬が入ってきた。

犬種は分からなかった。けれど、友達が飼っているのを見たことがある。

その犬は祥太にすり寄ってきた。

「よしよし」

祥太は犬を撫でた。すると犬は気持ちよさそうに「くうーん」と鳴いた。

犬はしばらくそうしていたが、急に縁側に飛び乗り、

「あっ」

と祥太が言う間もなく、置いていたペットボトルをくわえて走り去っていった。

「待て！」

祥太は慌てて追いかけた。この田舎で冷たい飲み物がどれだけ貴重なことか。

祥太が門をくぐると犬はすでに遠くあぜ道を走っていた。

幸い周りが殺風景なので見失わずにすんだが、それでも犬との間は開いていくばかりだった。

けれど急にあぜ道の途中で犬は止まり、しばらくしてから祥太もそこまでやってきた。

「こ、この犬、ハア、ハア、ペットボト、ル、ハア、返せ、よ」

息をぜえぜえと切らしながら祥太がそう言うと、犬はペットボトルを地面に置いて、祥太に向かって一声鳴き、自分の足元を見つめた。

そこには、枯れかけた花。

「……………」

犬はこの花に水をやりに来たのだろうか？

貴重な水。命の水。ここ数日で、水がどれほど貴重なものを祥太は分かっていた。

だから、この犬の気持ちが少し分かってしまった。この花の気持ちも。

祥太はペットボトルのフタを開けると、枯れかけた花に水をやった。すると、犬は再び祥太にすり寄ってきた。

一週間が過ぎた。祥太は毎日に水遣りを行った。祥太が水遣りに行くと、必ずあの犬がいた。

そして枯れかけていた花は、元の美しさを取り戻していった。

それは、姉に貰ったうちわに描かれていた、ハナビみたいなムラサキの花。思い出した名前、ナデシコ。

(後書き)

拝読ありがとうございます！ほんわかしていただければ幸いです。

中三の時、初めて自主的に書いた作品です。懐かしくなって、初心を忘れないためにも上げさせていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9575y/>

ナデシコ

2011年11月28日20時47分発行